

九世紀ビザンツ教会人の西方教会意識

—— ストゥディオスのテオドロスと総主教フォティオスの書簡に見る「西方」教会 ——

岸 田 菜 摘

はじめに

中世の東西キリスト教会の関係性は、一般的には分裂と発展というキーワードで語られている。地中海世界と重なり合うようにして存在していた古代のキリスト教世界は、中世に入ると、イスラーム世界の成立やカロリング朝の勃興などの要因により、ローマおよびコンスタンティノープルを中心とする二つに分裂した。またそれぞれの教会世界は他地域・異民族への宣教活動によってその領域を拡大し、教会内部においても様々な改革が行われ発展を遂げた⁽¹⁾。

上記のようなキリスト教世界の分裂がいつどのように行われたのか、研究史上では様々な分析がなされている。両教会の分裂といえば、かつての定説では1054年の東西教会の相互破門という事件に始まるとされていた⁽²⁾。しかし現在では、東西教会関係に対する相互破門の影響力は否定されている⁽³⁾。むしろ現在では、東西教会はひとつの事件によって分裂したわけではなく、より長い期間に渡って次第に分裂と発展のプロセスを進んでいったと考えるべきである、というのが近年の研究者たちの共通認識である。

しかし、中世のキリスト教会は、単にお互いの繋がりをなくし分裂していったわけではない。実質的には分裂が進んでいるとはいえ、それぞれの時代において、キリスト教世界が一体であるという概念のなか、ローマを中心とするラテン=カトリック教会とギリシャ=正教会は頻繁に交流していたともされる⁽⁴⁾。

本研究では、主に九世紀の東西教会の関係性を取り上げる。九世紀の東西教会の対立であるフォティオスのシスマ研究の大家として知られるドヴォルニクによれば、東西教会の分裂と個々の発展の兆しは九世紀から現れてくるとされるように、九世紀には東西教会の関係は新たな展開を迎えたと考えられている⁽⁵⁾。しかしその一方、キリスト教世界は古代から続く一体性を完全には失ったわけではないとも言える。たとえばフォティオスのシスマで問題となったニカイア信条へのフィリオクエの挿入は、カロリング朝の影響下にある教会では行われているものの、ローマ教会では採用されるには至っていない⁽⁶⁾。また、イコン崇敬を巡っても、ローマ教会とビザンツの正教会の間にはさほどの認識の違いはなかった。

そもそも東西教会と言っても、九世紀の時点のキリスト教世界を、ローマ=カトリック教会と

ギリシャ＝正教という二つの勢力に二分されたものどこまで言えるのだろうか。たとえばローマ教会とカロリング朝影響下の教会は教義上の認識や利害関係の点においてしばしば意見の相違が見られ、当時の西方キリスト教世界は未だ一枚岩であったとは言えない状態であった⁽⁷⁾。

ビザンツの異端学の研究者であるコルババは、異端学という側面からビザンツ人の自己認識、またとりわけラテン人に対するビザンツ人の他者認識について分析し、東西教会の関係性を考察している⁽⁸⁾。それによれば、九世紀の時点ではフォティオスのシスマで一部のラテン人たちの教義（フィリオクエ問題）や習慣を「異端」とは非難しているものの、それは民族的な意味での「ラテン人」に対する非難ではなく、古典的な異端学に基づくステレオタイプな非難にすぎないとされる⁽⁹⁾。つまり、ビザンツの知識人たちは九世紀の時点ではまだ、ローマ教皇の管轄権のもとにあるラテン語を公用語とする地域の教会を、異端的な存在あるいは他者として見ていたわけではなかった。彼らはあくまでも同じキリスト教世界の、またローマ帝国の一員でもあり、ビザンツ人と彼ら西方のキリスト教徒たちとの間の自他の線引きは未だに曖昧なままであった。コルババの見解を引き継ぎ、ターナーの研究では更に総主教フォティオスの、「フォティオスのシスマ」の折に作成された総主教回勅として知られる第二書簡の分析から、彼のラテン人とその異端の見解に対する態度、そして回勅が西方の教会に齎した影響について考察されている⁽¹⁰⁾。

上記のように、九世紀のビザンツ人の西方教会に対する態度に関しては、専ら総主教フォティオスを例に挙げての分析がなされている。フォティオスは言うまでもなく「フォティオスのシスマ」でローマ教会と論争をした当事者であり、彼のフィリオクエ論争をはじめとしたローマ教会への批判が後世の東西教会の対立の先駆であった、というかつての定説を再検証するためには重要な人物であると言える。しかし、フォティオスはあくまでコンスタンティノープル総主教として、ローマ教会と対立した存在として発言しているのであり、彼だけの発言をもって九世紀のビザンツ人の西方教会に対する態度を推しはかることはできない。そこで本研究ではフォティオスに加えて、フォティオスより少し前の時代、第二イコノクラスム期間にイコン崇敬派として活躍し、ビザンツ皇帝や総主教と対立したストゥディオスのテオドロスを採り上げる。具体的には、この二人の人物のローマ教皇や西方カトリック世界の教会人に宛てた書簡からその考えを明らかにする⁽¹¹⁾。彼らそれぞれ対極的な立場に立っていたビザンツ人がローマを含む西方地域の教会に対してどのような態度をとり、交渉したかを分析し、その相違点から九世紀のビザンツ人の、「西方」教会に対する意識の諸相を考察したい。

1 八世紀までのキリスト教世界

前述したように、キリスト教世界がいわゆる「東」と「西」に分かれたのはかなり後になってからのことである。しかし明確な線引きがないとはいえ、地中海世界はラテン語を用いる西側と、ギリシャ語を用いる東側という色分けができ、二つの地域にはもともと多少の文化的差異が存在

したとされる⁽¹²⁾。451年のカルケドン公会議では、キリスト教会の最重要事項は五つの総主教座の長あるいはその代理の会議によって決定すると定められた⁽¹³⁾。そのうちの一つがラテン語を用いるローマ教会であり、残りの四つすなわちアレクサンドリア、アンティオキア、コンスタンティノーブル、エルサレムの教会はギリシャ語圏に属していた。

地中海世界を二つに分けるこの言語世界は、本来地理的なものというより、どちらかと言えば機能的なものであったとされる⁽¹⁴⁾。首都ローマで使用されるラテン語は政治的な意味で必要とされる言語であるのに対し、ギリシャ語は主に文化的な事象において用いられる言語であった。そのため、帝国の上流階層、知識人たちは両方の言語を習得していることが理想とされた。しかし、ディオクレティアヌス帝やコンスタンティヌス帝によって帝国の政治的中心が東方に移動すると、この二つの言語世界は時間をかけて徐々にお互い分離し、ユスティニアヌス帝の治世の終わりごろまでには地理的な要因によって隔てられるところとなったとされる⁽¹⁵⁾。

二つの言語世界の分離の影響は教会内部にも表れている。451年のカルケドン公会議では、参加者についても東方の聖職者たちが多数派を構成し、神学的にも東方よりの思想に支配されていた。また680/681年に開催された第六回公会議の続きとして691年に開催されたトルス教会会議では更に東方寄りとなり、ローマ側からの参加者が極めて少数になると同時に、西方教会の慣習に対する批判がなされた⁽¹⁶⁾。

さらに、政治的な面でも七一八世紀には変動があった。イスラーム勢力の勃興によって、アレクサンドリア・アンティオキア・エルサレムの三つの総主教座は帝国の領土から抜け落ちた。それは必ずしもキリスト教世界からの脱落を意味するものではなかったが、少なくともこれ以降、この三つの総主教座は政治的な重要性を失ったとされる。いまや総主教座のなかで最も有力な地位を巡って争う力のある存在はローマとコンスタンティノーブルの二つとなり、これが二つの教会の対立を際立たせたとする見解もある⁽¹⁷⁾。

また、八世紀にアルプス以北でカロリング朝が勢力を増し、ヨーロッパの政治秩序のなかに新規に参入したことも、ローマ（あるいは西方の）教会を取り巻く環境の変化と言える。800年のカール大帝の戴冠に象徴されるように、カロリング朝はローマ教会の新たな政治・軍事的同盟者となった。これにより、ビザンツ皇帝という既存の宗主との関係に加えて、ローマ教会はカロリング朝との同盟という新たな外交関係を構築した⁽¹⁸⁾。ローマ側がカロリング朝皇帝に戴冠し権威を与える一方で、カロリング朝側はローマに主に軍事的な支援をするという互恵的關係はローマ教会にとって、八世紀当時イタリア半島に干渉する余力のなかったビザンツとの関係にも劣らない重要性があったと考えられる。そして一般的にはこれ以降、ローマ教会は政治的に独立した存在としての発展を始めたとも言われている⁽¹⁹⁾。

しかし、ローマとコンスタンティノーブルがこの時代に完全に分離し断絶したというわけでは決してない。実際はどうであれ、名目上でも教会人たちの意識の上でもキリスト教会は統一性を

保ち、同じ正統信仰を保持していた。教義について言えば、単性論派が多数存在したシリアとエジプトがイスラームの支配下に入ったことで長期に渡って論争となっていた単性論派異端の問題が解決し、逆説的に帝国内部ではローマとコンスタンティノープルが共に支持していた正統信仰による統一性が保たれたと言える⁽²⁰⁾。

当時のローマ教会は、キリスト教世界の中で同じ正統信仰を擁護する存在として、皇帝の首都であるコンスタンティノープルに対抗しうる存在と考えられていた。単性論、単意論、そして聖画像崇拝否定（イコノクラスム）派が首都で優勢となると、それを支持した皇帝や総主教に反発した聖職者や修道士たちは、首都から距離を置き、また五つの総主教座のうち名誉上最も上位に位置すると考えられていたローマ教会に庇護を求めて身を寄せた。ローマに亡命した教会人として有名な例は、七世紀の証聖者マクシモスや、第二次イコノクラスムの際のメトディオス（後のコンスタンティノープル総主教メトディオス1世（843～846））が挙げられる。おそらく彼ら東方の教会人たちは、ローマに存在していた正教会系の修道院に滞在していたと考えられる。ローマ教会は彼らの避難所となることで、正統信仰の擁護者としての地位を築いていた⁽²¹⁾。

ローマ教会が東方の教会人から正統信仰の擁護者として考えられていたことは、ローマ教会自身も十分に意識していた。東西教会の間で問題となるフィリオクエの挿入は、当時のローマ教会ではまだ採用されておらず、またカロリング朝では795年の教会会議で聖画像崇拝を否定する宣言が出されたのに対し、ローマ教会は第二ニカイア公会議と聖画像崇拝を擁護した。教義に関するローマ教会とコンスタンティノープル側の協調は、単に教皇の伝統的な義務として公会議に参加し、その決議に賛同するという以上に積極的なものだったと考えられる。

たとえば九世紀の教皇文書局長として知られるアナスタシウス・ビブリオテカリウスは、書簡の中で聖画像崇拝の正当性を主張し、自ら第二ニカイア公会議の決議録のラテン語訳を作成している⁽²²⁾。またアナスタシウス・ビブリオテカリウスの翻訳活動を研究しているフォレイによれば、彼が証聖者マクシモスなど、ビザンツ皇帝やコンスタンティノープル総主教の意志に反して正統信仰を擁護し、ローマに助けを求めた人物の著作をギリシャ語からラテン語へと翻訳したことも、ローマ教会の正統信仰擁護者としての立場の強調ではないかと主張している⁽²³⁾。

以上のことから八世紀までのローマとコンスタンティノープルの関係をまとめると、両者はおなじキリスト教世界の一員であり、政治的な変化やそれに伴う相互のネットワークの弱体化、慣習上の差異があったにせよ、意識の面では未だにお互いを他者と認識しているわけではなかった、と言えるのではないだろうか。ローマとコンスタンティノープルは同じ正統信仰の擁護者という面ではある意味ライバルであり、また他方で迫害を受けた際には頼るべき存在であった。

2 ストゥディオスのテオドロスとローマ教会

はじめに、ストゥディオスのテオドロスを例にとり、九世紀ビザンツの聖職者・修道士とロー

マ教会の関係を考察する。

ストゥディオスのテオドロスは、首都の官僚一族に生まれ、修道院改革を行い、第二次イコノクラスムでは聖画像崇敬を擁護したことで知られる人物である⁽²⁴⁾。826年イコノクラスムの最中に追放先で死去したが、843年の聖画像崇敬派の勝利の後、彼は聖人として崇敬された。首都の大修道院であるストゥディオス修道院長として九世紀ビザンツにおける修道院改革の中心的な人物としても知られる一方、795年から811年にわたって続いた皇帝コンスタンティノス六世の再婚問題を発端とする『姦通論争』の当事者になるなど、修道士として教会や政治にも積極的に干渉した人物として知られている。テオドロスは『姦通論争』と第二次イコノクラスム（815-843）の二つの事件の際、ローマ教皇に書簡を通じて助力を求めている。ビザンツ皇帝や総主教と対立したテオドロスは、前述したローマ教皇を頼ったギリシャ系の神学者の典型例として考えることが出来るだろう。

『姦通論争』は前述のように皇帝の再婚をきっかけとする事件で、テオドロスは皇帝の再婚を祝福した聖職者である聖ソフィア教会の執事カタラのヨセフを非難した。しかしその結果、テオドロスは809年に教会会議によって破門と追放を言い渡されてしまう。テオドロスがローマ教皇に書簡を送ったのはこの追放期間のさなかだった。

現存する限りでは二通、おそらくはそれ以上の回数に渡ってテオドロスはローマ教皇レオ三世に対し、自らのストゥディオス修道院の修道士によって書簡を送っている⁽²⁵⁾。第33番書簡では修道士のエウスタティオスとエピファニオスの二名が使者として確認できる。テオドロスは書簡を通じて『姦通論争』の経緯を自分なりに報告し、自らの立場の正当性をローマ教皇に伝えた。

書簡の中で、テオドロスは教皇に対して並々ならぬ敬意を表している。たとえば第33番書簡の冒頭で、テオドロスは「聖なるキリストは偉大なるペテロに、天の王国の鍵と共に、羊飼いの長としての名誉をお与えになったがために、ペテロとその後継者たちは、普遍なる教会の中で新規なことどもを、真実から過ちへと導くことから引き離し、隔離するべきとされた」と、ローマ教皇を賛美した⁽²⁶⁾。

さらにテオドロスは、ローマ教皇に対して公会議を開いて『姦通論争』の決着を付けるように求めてさえいる。たとえば

もし彼らがそれらと共に異端の会議を開催することを恐れることさえせず、また正統信仰を、昔からの権威ある習慣のように、あなたの知識なしに指図するのであれば、多くの善き言葉が必要であり、私は恐れと共に、聖なる教会の指導者であるあなたと共に、教会の正当なる教義が異端を追放し、貴方の指導が正統信仰を異端の声によって破門したり、不法な姦通会議を根拠としようとした人々が罪に陥るようなこともなかった、法に適った会議が皆の賛同を得たことを思い出します⁽²⁷⁾。

テオドロスの求めに対して、教皇側の史料は現存していないため、レオ3世がどのような返答をしたのかは定かではない。811年には追放中のテオドロスに恩赦が下されるが、プラッチュによれば恩赦の理由は教皇の介入というよりも、むしろビザンツ国内の事情、特に新しく皇帝に即位したミカエル1世の権力基盤の弱さに由来するテオドロス一党への妥協と推測されている⁽²⁸⁾。

815年に皇帝レオン5世が第二次イコノクラスムを始めさせると、テオドロスは聖画像崇敬擁護派として強固な抵抗運動をはじめた。ここでもテオドロスは国内での抵抗に加えて、帝国外部に対して盛んな働きかけを行っている。ローマに対してテオドロスは他の修道院長と連名で教皇パスカリス2世に書簡を送り、またアレクサンドリア総主教、エルサレム総主教や同地のサバス修道院にも書簡を送っている⁽²⁹⁾。

第271・272番書簡では、カタラ修道院長ヨハネス、ピクリディオス修道院長テオドシオス、パウロベトリオス修道院長アタナシオスなどとの連名で、教皇にイコノクラスムの経緯を説明し助力を求めた。またテオドロスは別の書簡で、イコノクラスムに反対して罷免された元総主教ニケフォロスを議長として、ローマを含む他の総主教座の代理を招いて公会議を開き、イコノクラスムの問題を解決するべきであるとしている。

おお旦那様、現世の秤と神の秤を比べることや、五つの総主教座の同意なしに教会が統一されることは不可能です。もし誰かが、神の教会の中の異端が隔離され、聖なる総主教であるニケフォロスのコンスタンティノーブル総主教位が回復するようなことが起こることはどのようにすれば受け入れられるのかと尋ねたならば？ ニケフォロスは共闘している人々と共に会議に参加し、(もし他の総主教たちによって会議に出席することが拒否されたなら、もし皇帝が西方の人が参加することを望むのならば、まさにその人が参加することが可能であり、それによって普遍公会議の効力が得られるでしょう) 平和と統一を成し遂げ、われわれの教会会議を通じて第一位であるそちらに使者を送ることは明らかです。もしそれが皇帝に受け入れられるべきではなく、また人の言うように、真実の議長であるニケフォロスが我々と共に意見を変えたのであれば、それぞれに従ってローマへと不動なる敬虔をこちらから送るべきです⁽³⁰⁾。

ローマ教皇に対する一連の働きかけから、テオドロスはかつて正教会人としてローマ教皇の首位権を認めた人物として取り上げられることもあった⁽³¹⁾。しかし近年になるとプラッチュなどの研究者により、そういった見解は否定されている⁽³²⁾。それによればテオドロスは確かにローマ教皇に対して並々ならぬ敬意を示してはいるが、それは教皇の首位権のためではなく、あくまで五つの総主教座のうちの最も名誉ある使徒座としてのものだった。

テオドロスがローマに働きかけをした背景としては、やはり『姦通論争』や第二次イコノクラスムなど、コンスタンティノーブルの総主教や皇帝が、彼の考えるところでの異端的な過ちに陥っていたという状態が重要だったのではないだろうか。そのような非常事態の解決策として、テオドロスはローマ教皇の助力をもって、あるいは教皇を含む総主教座の長たちの公会議でもって異端を取り除こうとした。このようなテオドロスの姿勢からは、彼が最も上位の権威として強調していたのが皇帝や総主教の決定ではなく、特にローマ教皇を含めた公会議であると考えていたと推測できる。テオドロスにとって、ローマ教会とは同じキリスト教世界の一員であり、教会で最も重要な事項を決定する公会議を構成する重要な要素だった。

また、テオドロスはローマに情報を伝えるにあたって、常にローマに存在した正教会系のサバス修道院の修道院長バシレイオスに宛てた書簡を同時に送っている。『姦通論争』期には第35番書簡を、第二次イコノクラスムには第273番書簡をそれぞれ執筆したことが確認できる。書簡の序文でバシレイオスが「アルキマンドリテス」と称されていることから、この修道院がローマに存在していたであろうギリシャ系修道院を統括するような役割を果たしていたのではないかと考えられる⁽³³⁾。

テオドロスはバシレイオスに対して、ローマ教皇その他への交渉の仲介をするように頼んでいる。たとえば第35番書簡では以下のように記している。

そして祝福されたる力強き主は、あなたを多数の中で最初のものに置き、光を放つ神のたいまつとして、善き行いのなかの大きさに生命から閉ざされた言葉を置き、あなたに聖なる正統信仰の教えを、高らかな鬨の声と共に雄弁に語る舌を与えた。それについて、私は我々の教会と、こちらの有力者と、聖なる使徒に対する調停に関して（あなたに）助けを求める⁽³⁴⁾。

一説には、この修道院はアナスタシウス・ビブリオテカリウスがギリシャ語を学んだ場所であるともされ、サバス修道院は単にテオドロスが頼ったというだけではなく、九世紀のローマ＝ビザンツ間の、そしてラテン語・ギリシャ語圏間の交渉の重要な拠点になっていたと考えられる⁽³⁵⁾。一般的には八―九世紀に東西教会の交渉は途絶えがちになったとされているが、テオドロスの書簡からはローマとコンスタンティノーブルそれぞれの教会だけではなく、修道院間のネットワークも存在していたことが分かる。

また、テオドロスだけが、このようなラテン語・ギリシャ語圏を超えたネットワークを利用したわけではない。861年に始まるフォティオスのシスマの発端は、シチリア大主教グレゴリオスがフォティオスの前任の総主教イグナティオスから罷免されたことをローマ教皇に対して訴え出したことだとされている⁽³⁶⁾。また、逆にイタリア近辺の聖職者がコンスタンティノーブル総主教に訴えた事例も存在する。フォティオスの第二書簡によれば、イタリアの司教たちが教皇ニコラ

ウス1世の支配への不服をフォティオスに訴え出ている⁽³⁷⁾。

テオドロスおよびこれらの事例からは、当時のキリスト教世界が理念上は未だにひとつであったことが伺える。本来、別の総主教座の裁治権にある問題を、その管轄外の総主教が扱うことは禁じられていたが、実際には聖職者たちはそれぞれ様々な理由から、遠く離れた教皇や総主教に自分たちへの助力を願った。その意味では五本山制の理念やキリスト教世界の統一性は未だに失われていないように思われる。

しかし、テオドロスの書簡から分かる「西方」の教会への意識は、もっぱらローマ教会に向けられたもので、同じく西のラテン語圏に存在したフランクなどに対してどのような意識を持っていたかは全く分からない。確かに五つの総主教座という意味ではキリスト教世界の統一性は失われていなかったかもしれないが、それは例えばローマに関して言えば都市ローマとその近辺だけの状態であって、本来それらが管轄するはずである地域全体に関しては別の問題が存在するであろうと考えられる。特に次章で登場するフランク（カロリング朝）の教会は、五本山制の枠外に現れた存在であると言えるだろう。

3 フォティオスのシスマとローマ教会

九世紀後半、東西教会の間でニカイア信条の文言の中にある聖霊の発出を巡る論争、いわゆるフィリオケ問題が生じ、後に顕著となる東西教会の教義面での相違の発端になったと言われている⁽³⁸⁾。特にニカイア信条へのフィリオケの挿入は、東西教会合同の試みがなされるなかで、最も正教会側がラテン教会の過誤であるとして攻撃した問題である⁽³⁹⁾。しかし、フィリオケの問題をビザンツで初めて指摘した総主教フォティオスは、当時「東西」教会の違いにどこまで自覚的だったのだろうか。フォティオスはローマ教会との論争に関していくつかの書簡を残しているが、特にローマや彼が「西」と呼ぶところの教義・慣習にまつわる発言に注目したい。

一般的に、861年のコンスタンティノーブルで開かれた公会議で、ローマ教皇がフォティオスの総主教即位を認めないとしたことが、九世紀後半の東西教会の分裂である「フォティオスのシスマ」の発端とされている。863年にはローマでニコラウス1世によってフォティオスの断罪が決議され、それに対して867年にはフォティオス側がニコラウス1世を断罪している⁽⁴⁰⁾。

このように、フォティオスのシスマとは基本的には教会行政上の問題だったと言ってよい。その背景には、レオン三世によってローマ教会からビザンツ側へと移されてしまった南イタリアとシチリアの教区の裁治権の問題、また865年以降に現れた問題である、ブルガリアにおける東西教会の宣教活動の衝突が存在した。861年、869年、879年に開かれた公会議で、ローマ教皇使節は南イタリア・シチリアおよびブルガリアの裁治権を繰り返し主張している。

867年の公会議で、フォティオスは初めてフィリオケの問題を指摘した。フォティオスの第2番書簡は、一般的には867年の教皇ニコラウス1世を断罪するための公会議を告知した総主教

回勅として知られているが、そこでフォティオスは「西の主教たち」に関して次のような非難をしている。

また野蛮にしてキリストを嫌悪していたブルガリアの民が、父祖の悪魔的な礼拝から離れて異教徒の迷信を捨て去り、神の認知と洗練の側に身を寄せ、驚くべきことにキリスト教徒としての信仰へと移行した。

しかし、おお、なんと嘆かわしい、悪意ある不敬の心と行為のあることか！ というのも、以下のごとき事情がある。福音の知らせが憂鬱の中に置かれ、悲しみの涙の中に陽気な喜びがある（ように）。かように人々は二年とかからず名誉あるキリスト教徒としての正しい信仰（を持ったのだが）、避けるべき不信仰の男たちが——余はそのような人々の名を呼ぼうとはしないが——闇から現れた男たちが——西方の行い（典礼？）を始め——おお、何と残りのことを説明すればいいのだろうか！——敬神へと新たに加入し定まった人々を、彼らはさながら稲妻、地震、あるいは雹の如くと言うに相応しく、群れから離れた野の獣が、喜ばしくも新たに植栽された主の葡萄園を、その歯や脚で飛び跳ねるが如く、教義の破壊と不面目なる行政の遅延でもって（荒らし）、彼らは傲慢になり、彼らから離れた人々は虐げられた。

彼らはかような人々（ブルガリア人）を正しく清らかな教義、キリスト教徒としての汚れなき信仰より引き離して墮落させんと工夫を巡らせた。はじめに彼らは（我々と）同様に水曜と金曜に断食を行うのではなく、土曜の断食へと変更してしまった。そして直ちに移行された断食の無効性が明らかになると、教義全体を損なうことを恐れなかった。それから断食の最初の一週間を他の断食から分離し、乳を飲みチーズを食らい、同様の暴食へと墮落させ、そして人々に逸脱の道を開き、真っ直ぐな王道を歪めようとしている。更にそのうえ、法に合った結婚をした司祭たちの存在は周知の事実であるのに、多くの娘たちを夫から離れた妻と見なし、その妻たちは父親の顔を見たこともない子供たちを育てている。彼らは聖なる司祭たちがあからさまに憎まれ敵対されるように仕向け、人々の裡にマニ教の種を蒔き、今まさに芽吹き始めたばかりの魂、敬神の種を、毒麦の種を新たに蒔くことによって虐げている⁽⁴¹⁾。

フォティオスはさらに、フィリオクエに関してはこのように報告している。

また、そのような逸脱がもたらされただけでなく、何か悪しきことの冠のようなものがあるとすれば、それは以下に述べる事態を出現させた。まさしく前述の告発に加えて、神々しくも聖なる象徴を、全教会会議と普遍公会議によって平和裏に有効とされたものを、誤て

る思考、語句の挿入、すなわち軽率なる蛇足であるものを混淆して純粹さを汚そうと試み（おお、なんと無用なる発明であることか！）、つまり聖霊がただ父からだけではなく子からもまた発出するなど新たに言い出したのである⁽⁴²⁾。

東西教会の分裂という視点では、このフォティオスの第2番書簡こそがラテン教会との教義上の分裂の先駆けと認識されることが多い。しかし、フォティオスが書簡の中で非難しているのはあくまで「西の主教たち」であって、ローマ教会を名指して批判しているわけではなかった。

そもそも、フォティオスがここで批判しているのは、ブルガリアで宣教活動している人々のことである。当時、支配者であったボリス汗がキリスト教の洗礼を受けたことにより、ブルガリアには多数の宣教師たちが送りこまれていた。ボリスは正教会で洗礼を受け、皇帝ミカエル3世が代父となりボリス＝ミカエルと名乗ったとされ、865年頃にフォティオスはボリスに対してキリスト教国の君主としての心得を記した第1番書簡を送っている⁽⁴³⁾。また一方でボリスはローマ教皇側にも使節を送り、宣教師たちの派遣を要請し、これに対してニコラウス1世はフォルモススら司教たちを派遣した⁽⁴⁴⁾。それだけではなく、隣接するカロリング朝の教会からも宣教師たちがブルガリアに派遣されていた⁽⁴⁵⁾。ニコラウス1世が執筆した、ボリスから提出されたキリスト教の慣習と教義に関する質問状に対する回答集からは、当時のブルガリア宣教がビザンツ・ローマ教会・フランク王国その他の影響下で混乱していた様子がうかがえる⁽⁴⁶⁾。

フォティオスが「西の主教たち」という名前で仄めかしたのは、主にブルガリアで活動していたフランクから来た宣教師たちのことだと考えられる。当時ローマ教会はフィリオクエをニカイア信条に挿入してはおらず、フィリオクエの挿入を採用していたのはもっぱらカロリング朝の影響下にある教会だった。他方、フォティオスは行政上の意見の齟齬を抱えてはいたものの、ローマ教会そのものに対して異端と非難したことは一度もない。むしろ教義の面に関しては、ローマ教会がビザンツ側と連動していたことを把握していたはずである。たとえば第291番書簡ではローマ教会は他の四総主教座と一致した意見を持っている、とローマ教会の立場を擁護している⁽⁴⁷⁾。

前述のフィリオクエの問題に加えて、第2番書簡でフォティオスは第二ニカイア公会議、すなわち聖画像崇敬が正統信仰であると決議した公会議に関しても、以下のようなことを述べている。

また以下のことが同意されるのを欲して、私は書簡にて命じる。聖なる普遍第七回公会議が、六つの聖なる普遍公会議と共に置かれること、我々によって教会を補完するあらゆるものの一つとして加わることが、伝統とされるように。あなたがた使徒座に属するいくつかの教会が、第六までを普遍公会議と見なしているにも拘らず、第七回に関しては異なるものと見なしているということが言われている。だがその公会議で定められた事柄は、もし何か異なっ

た規定があったとしても、時をおかずしてきわめて尊いものとして保持されている。またどこに於いてであれ、かの公会議には同等の名誉が保たれていると認識されているが、公会議の教会に関する公示は他の公会議と同様に、以下のように行われた⁽⁴⁸⁾。

ここで述べられている第七回公会議を普遍公会議と認めない人々も、おそらくはフランク人たちのことを指していると考えられる。カロリング朝では794年のフランクフルト教会会議で聖画像崇敬を偶像崇拜として非難し、第二ニカイア公会議を第七回公会議としては認めていなかったからである⁽⁴⁹⁾。おそらくはこの問題にフォティオスが触れたのも、ブルガリア宣教でギリシャ人宣教師とフランク人宣教師が接触したことと無関係ではないように思われる。

867年に執筆されたとされる第2番書簡は、ローマ教会との論争中という性質上、伝統的な異端学に則った言葉を使い、「西」の異端的な慣習や教義を厳しく非難している。しかしその後にかかれた、アクイレリア大司教宛とされる第291番書簡では同じくフィリオクエを論じてはいても、異なる態度を取っている⁽⁵⁰⁾。

867年に教皇ニコラウス1世が没し、同年にフォティオスもクーデターによる王朝交代によって失脚すると、869年にビザンツはローマ側に歩み寄った公会議を開いた。またその後、ビザンツがイタリア半島への軍事的影響力を拡大すると、879年にはローマ側があらためて878年にもう一度即位した総主教フォティオスを認め、教会分裂の終わりを宣言する公会議が開かれた。第291番書簡は、おそらくその後、882～3年に書かれたものであろうと推測されている⁽⁵¹⁾。

フォティオスもまた、皇帝バシレイオス1世のイタリア政策と連動するように、ローマ教会に対してビザンツ側との友好関係を回復するよう働きかけていた。たとえば869年の教皇使節を務めたマリヌスやゴイデリクスに対しては、かつての敵対を終え友好関係を求めた書簡が残っている⁽⁵²⁾。291番書簡もまた、一般的にはヴェネツィアをその教区内に有するアクイレリア大司教に宛てた書簡であるとされるが、コルババはアクイレリアではなく、そのライバルであるビザンツ寄りのグラード大主教に宛てた書簡であるとしている⁽⁵³⁾。どちらであるにせよ、フォティオスがこの書簡を送って聖霊の二重発出を批判した理由は、おそらくその地域にフランク人たちによるフィリオクエの挿入の影響が存在したからであると考えられる。

書簡の冒頭は大司教に対する友好的な言葉で始まったのち、フィリオクエに関して以下のように述べている。ここでもまた、非難されているのはローマ教会ではなく「西の」聖職者たちである。

貴方の聖なる善性についてそのように余は理解し、またその行いについて喜び誉れとしたがために、今余の耳に入ったこと——肉体ではなく魂の病であるためそれは不必要である——が切り離されたことに大いなる希望を得た。またその出来事は覆い隠されずにあるべきであ

ると余は判断した。というのも、以下のことが世の耳まで運ばれてきた。西方のとある者たちが——それを苦痛なしにいかにして述べるべきか余は知らないのだが——、主の言葉によく慣れていないせいか、教父たちや公会議や教義の言葉について誰も知識を持っていないためか、その正確さについて見逃しがあるか、あるいはそのような事柄に対して頑なな精神を持っているのか、あるいは誰がそう言うのか私は知らないが——そうあるべきではないのだが——余の耳には西のとある人々が、聖霊は父なる神だけではなく、子からも発出することを教え、そのような言葉を通じて説得された人々に多大な害を与えていることが届いた⁽⁵⁴⁾。

フォティオスは、教皇レオ1世やレオ3世などローマ教会の教父たちの言葉を引用して、ローマ教会が常に正統信仰のもとにあったことと彼らがフィリオクエにいかん抵抗したのかを述べている。またアンブロシウス、アウグスティヌス、ヒエロニムスなどラテン教父たちについては、彼らが聖霊が子からも発出すると主張したことについて異端であると非難するわけではない、とも述べている⁽⁵⁵⁾。

ローマ教会には友好的な態度を示す一方、フォティオスはラテン語を神学に適さないと評価している⁽⁵⁶⁾。フォティオスのラテン語に対する態度は、同時代や後世のビザンツ人にも共通して見られる態度であった。たとえばラテン語が神学の精密な概念を扱うのに不適當であり、それゆえ異端的な考えが現れても仕方がない、といった言葉は11世紀のアンティオキア総主教ペトロス3世の書簡にも見られる⁽⁵⁷⁾。これはビザンツ人の、西のラテン語世界に対するステロタイプな見方と言えるだろう。

以上、フォティオスの第2番書簡と第291番書簡から、彼の「西方」教会に対する言葉を抜き出してきた。二つの書簡の文脈や態度は異なるが、ひとつの傾向が見られる。それはフォティオスが西という言葉で、例えば「西方教会」、あるいはローマ教会やラテン＝カトリック世界のような一つの世界を表現しようとはしていなかったことである。フォティオスの意識では古代から続く総主教座の一つとしてのローマ教会がまず中心に存在し、その一方、ブルガリアをはじめとして一部で異端的な考えを広める「西の」者たち、神学的に洗練されていないキリスト教徒たちがいた。

おわりに

本論文では、主にストゥディオスのテオドロスと総主教フォティオスの書簡から、彼ら九世紀のビザンツ教会人がローマ教会、およびキリスト教世界の西半分をどのようなものとして意識していたかの分析を試みた。古代には地中海世界の全体に広がっていたキリスト教世界は、五世紀頃にはローマ、アレクサンドリア、アンティオキア、コンスタンティノーブル、そしてエルサレムの五つの総主教座がそれぞれの地域の教会の頂点に立ち、その代表者たちの合議である普遍公

会議でキリスト教世界全体の問題を決定する、いわゆる五本山制と呼ばれる制度が発展した。

しかし、7世紀から徐々に、地中海世界を二分するラテン語圏とギリシャ語圏という二つの世界の間で相互交流が疎となり、認識のずれが生じてくる。また政治的にもアレクサンドリア、アンティオキア、エルサレムがイスラームの勢力圏に入るとその影響力を失う一方、ローマはカロリング朝との新たな同盟関係を結び、独自の路線を歩み始めた。しかしローマとコンスタンティノープルをはじめとするギリシャ語圏の教会との関係は絶たれた訳ではなく、単性論論争やイコノクラスムにおいてローマは正統信仰を支持し続け、ビザンツ皇帝からの迫害を受けた神学者たちを受け入れることによって、正統信仰の守護者としての名誉をアピールできる立場にあった。

本論文では、九世紀ビザンツ教会人たちのローマ教会に対する認識について、ストゥディオスのテオドロスとフォティオスという、二人の教会人の言説から考察した。ストゥディオスのテオドロスは、『姦通論争』や第二次イコノクラスムで皇帝や総主教との対立に巻き込まれた結果、ローマ教会の助力を求めた。テオドロスは書簡の中で教皇をペテロの後継者、あるいは五総主教座のなかで最も名誉ある地位として敬意を示している。しかしこれは、やがて教皇が主張するであろう首位権を認めていたからではない。テオドロスが教皇に求めた具体的な行動は、キリスト教世界の一員として公会議に参加し、そこで協働して異端を排斥するというものだった。テオドロスの考えるキリスト教世界とは、五つの都市にある総主教座の合議である公会議によって教会の最重要事項を決める古代の五本山制と地続きのものであり、そこには未だ矛盾する要素は見られない。加えて、テオドロスを含む当時の教会人たちは、度々隣接する総主教区の長に対して、自らが巻き込まれた問題に関する仲裁を求めて、活発に連絡を取っていたことが分かる。

一方、フォティオスはローマ教会との対立のなかで、「西」の主教たちの異端的な教義や慣習を非難した。フォティオスの書簡からは、彼がローマ教会とは別に西方キリスト教世界に存在する勢力を認識していたことが読み取れる。フォティオスはローマ教会があくまで正統信仰を守っていることと対比して、彼ら西方の、主に当時フランク人によって行われていた慣習や教義的な差異を異端的であると主張した。フォティオスは彼らについて、神学的に洗練されていない人々と考え、その異端的な思想の理由づけをしていた。

以上、テオドロスとフォティオスという、それぞれローマ教会と協調的、対立的な立場にあった二人の教会人の言説をとりあげた。両者に共通して言えるのは、まだ彼らのなかでは自分たちとローマ教会との差異はほとんど意識されず、古代的なキリスト教世界の仕組みの中で捉えられていたことである。ビザンツの教会人たちがローマ教会とその管轄下にあるとされた教会に対してどのような印象を持っていたのかは人それぞれだった。一方ではテオドロスのようにローマ教会の伝統性に注目し、教皇を総主教と対抗しうる存在とし、他方ではフォティオスのように、ローマ教会を尊重しつつも「西方」の一部の教会の慣習の異端性を指摘し、神学的に洗練されていないとして下に見ていた。二つの見方は矛盾するものではなく、単にビザンツと同様に正統信仰を

支持するローマ教会と、その管轄下にあるが独自の発展を遂げていたフランク人たちという現実を映したものにすぎない。

ローマ教会＝正統信仰／フランク人＝「異端」的慣習という構図は、11世紀には変化を遂げる。例えば1012年にはローマ教会でフィリオクエの挿入された信条が初めて唱えられたとされている。またグレゴリウス改革がローマ教会に齎した影響も、1054年の相互破門の背景として指摘されている⁽⁵⁸⁾。11世紀には、9世紀にはローマ教会とその周辺には残っていた古代的なキリスト教世界の仕組みが、ローマ教会自体の変容によって消滅していったと推測される。また、ビザンツのイタリア半島への進出によって、ビザンツとローマ教会の間に存在していた南イタリアとシチリアの裁治権を巡る問題は、9世紀の頃より格段に具体性を帯びた。11世紀に生まれたこの二つの問題が、東西教会の関係をさらに変化させていくものと考えられる。

注

- (1) 正教会側から見た東西教会史の概説については A. Louth, *Greek East and Latin West: The Church AD 681-1071*, New York, 2007.
- (2) たとえば R. Southern, *Western Society and the Church in the Middle Ages*, Harmondsworth, 1970, pp.67-68.
- (3) 根拠としては東西どちらの年代記にも1054年の事件についてほとんど触れられていないこと、教皇の名前がコンスタンティノーブルのディプティクから消された理由を総主教座の聖職者ですら数世代後には記憶していなかったことが挙げられる。A. Louth, *op. cit.*, pp.316-318.
- (4) コルババは十字軍を機に東西教会世界の交流が質量ともに変化したとする。T. A. Kolbaba, "Byzantine Perceptions of Latin Religious "Errors": Themes and Changes from 850 to 1350," in *The Crusades from the Perspective of Byzantium and the Muslim World*, ed. by E. Laiou and Roy P. Mottahedeh, Washington D. C., 2001, pp.117-143.
- (5) F. Dvornik, *Byzantium and the Roman Primacy*, New York, 1966.
- (6) 記録上ローマ教会で初めてフィリオクエが唱えられたのは1014年、皇帝ハインリヒ2世の求めに従ったこととされる。A. Sicienski, *The Filioque: History of a Doctrinal Controversy*, Oxford, 2010, p.113.
- (7) ローマ教会とカロリング朝のモラヴィア宣教に関する政策の不一致については M. Betti, *The Making of Christian Moravia (858-882): Papal Power and Political Reality*, Leiden, 2014.
- (8) T. Kolbaba, *The Byzantine Lists, The Errors of Latins*, Chicago, 2000.
- (9) 特に9世紀の状況に関するコルババの論考は T. M. Kolbaba, *Inventing Latin Heretics: Byzantines and the Filioque in the Ninth Century*, Kalamazoo, 2008.
- (10) J. Turner, "Was Photios an Anti-Latin?: Heresy and Liturgical Variation in the Encyclical to the Eastern Patriarchs," *Journal of Religious History*, 2015.
- (11) ストゥディオスのテオドロスの書簡集は *Theodori Studiae Epistolae*, ed. by G. Fatouros, 2 vols., *Corpus Fontium Historiae Byzantinae* XXXI/1-2, Berlin, 1992.、フォティオスの書簡集は *Epistolae et Amphilochia*, ed. B. Laourdas and L. G. Westerink, 6 vols. in 7, Leipzig, 1983-88. にそれぞれ校訂版が収録されている。以後、それぞれ Theodoros, Ep. また Photios, Ep. と略。
- (12) Kolbaba, *Inventing Latin Heretics*, p.36.
- (13) J. Herrin, "The Pentarchy: Theory and Reality in the Ninth Century," in *Margins and Metropolis*, 2012, p.239.

- (14) Kolbaba, *Inventing Latin Heretics*, p.37.
- (15) *Ibid.*, p.38.
- (16) A. Louth, *op. cit.*, p.38.
- (17) J. Herrin, *op. cit.*, p.243.
- (18) J. C. Bishop, “Pope Nicholas I and the First Age of Papal Independence,” diss. of Columbia Univ., 1980, pp.96–166.
- (19) 詳しくは T. F. X. Noble, *The Republic of St. Peter: The Birth of the Papal State*, 680-825, Pennsylvania, 1986.
- (20) T. Kolbaba, *Inventing Latin Heretics*, p.39.
- (21) J. M. Sansterre, *Les moines grecs et orientaux à Rome aux époques byzantine et carolingienne (milieu du vi siècle-fin du ix siècle)*, Bruxelles, 1983, pp.49–51.
- (22) *Monumenta Germaniae Historica Epistolae 7 Karolini Aevi* 5, p.416.
- (23) R. Forrai, *The Interpreter of the Popes: The Translation project of Anastasius Bibliothecarius*, diss. of Central European University, 2008, pp.30–46.
- (24) テオドロスの生涯に渡る政治的活動について詳しくは T. Pratsch, *Theodoros Studites (759–826) -zwischen Dogma und Pragma (Berliner Byzantinische Studien 4)*, Berlin, 1997.
- (25) Theodoros, Ep.33, 34.
- (26) Theodoros, Ep.33, 5–9.
- (27) *Ibid.*, 60–68.
- (28) T. Pratsch, *op. cit.*, pp.180–181.
- (29) Theodoros, Ep.275 (アレクサンドリア総主教宛書簡)、Ep.276 (エルサレム総主教宛書簡)、Ep.277 (サバス修道院宛書簡)。
- (30) Theodoros, Ep.478, 78–91.
- (31) T. Pratsch, *op. cit.*, pp.312–313.
- (32) *Ibid.*, p.313.
- (33) J. Herrin, *op. cit.*, p.261.
- (34) Theodoros, Ep.35, 15–21.
- (35) J. M. Sansterre, *op. cit.*, p.69.
- (36) F. Dvornik, *Photian Schism: The Legend and History*, Cambridge, 1948, pp.39–69.
- (37) Photios, Ep.2, 322–323.
- (38) J. メイェンドルフ 『ビザンティン神学 歴史的傾向と教理的主題』 鈴木浩訳、新教出版社、2009年、148頁。
- (39) バライオロゴス朝にフィリオクエ問題が重要視された原因については T. Kolbaba, “Byzantine Perceptions of Latin Religious “Errors,”” pp.130–132.
- (40) フォティオスのシスマの経緯に関する詳細は F. Dvornik, *The Photian Schism*, pp.70–201. を参照。
- (41) Photios, Ep.2, 65–79.
- (42) *Ibid.*, 101–107.
- (43) Photios, Ep.1. 英訳と解説は *The Patriarch and the Prince: the letter of Patriarch Photios of Constantinople to Khan Boris of Bulgaria*, trans. by W. D. Stratoudaki, New York, 1982.
- (44) *Le Liber Pontificalis*, ed. with intr. and comm. by L. Duchesne, 3vol., Paris, 1955–7, vol.2, p.164.
- (45) *Annales Fuldensis sive Annales regni Francorum Orientalis*, ed. by G. Pertz and F. Kurze, Hannover, 1891, rep. Hannover, 1978, p.380.
- (46) Nicholas I, *Epistolae* 99, *Monumenta Germaniae Historica* VI, ed., by E. Perels, Berlin, 1925, pp.568–600.
- (47) Photios, Ep.291, 379–382.

- (48) Photios, Ep.2, 349-358.
- (49) A. Louth, *op. cit.*, p.87.
- (50) Kolbaba, *Inventing Latin Heretics*, pp.111-114.
- (51) *Ibid.*, p.111.
- (52) Photios, Ep.272-273.
- (53) Kolbaba, *Inventing Latin Heretics*, pp.106-110.
- (54) Photios, Ep.291, 35-48.
- (55) *Ibid.*, 245-365.
- (56) T. Kolbaba, *Inventing Latin Heretics*, p.115. コルババはフォティオスのラテン語への評価は傲慢だが侮蔑的なニュアンスではないとしている。
- (57) *Patrologiae Cursus Completus, Series Graeca*, vol.120, col 808.
- (58) A. Louth, *op. cit.*, p.318.

(日本学術振興会特別研究員 DC)